

主筆 江原萬里

# 聖書の眞理

第五十二號

二月號

昭和三年二月十六日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

基督の不和

世の悲惨と神の存在

エレミヤ記の研究

北よりの禍

戦争論

柏木通信

祖父の書翰

内村鑑三全集の刊行（その一）

江原萬里

江原萬里

藤本武平二

齋藤宗次郎

江原萬里

感謝と希望

昭和七年二月一日發行

## 内村鑑三全集の刊行（その一）

徳川幕府三百年の桃原の夢が、一朝黒船の來訪に由つて破られてより、我が國民は狹隘なる島國の外に世界の存在を知らされた。且つ彼の文物諸制度は遂に我が國のそれに優秀である事を發見した。爰に於てか、廣く知識を海外に求め、盛に文物制度の輸入を始めたる。彼に摸して憲法は制定せられ、代議政治は創められ、教育制度は建てられ、陸海軍の防備は整へられ、大に産業は奨励せられた。

かくて僅々数十年、アジア大陸に附屬する葢爾たる一群島の民を以てして、日清、日露の戦役に赫耀たる大勝を得、世界大戦を経て遂に嚴然たる世界強大國の一となり、東洋の霸權を掌握するに至つた。此の間、東洋の諸邦は西力東漸の渦卷に拉せられて、沈滯萎靡、其の國の獨立をすら失ふもの少なかつた時、獨り我が國のみが此の如き光榮ある大發達をなし、今尙發展しつゝある事は、世界萬國民の驚異であり、正に世界史上の一大奇跡である。

そも何が、此の沈滯萎靡せる東洋諸邦中に在つて、獨り我が國民のみに此の如き大發展をなさしめたのか。その將來は如何。こゝに世界的興味あり、全人類の關心事がある。そも「卷物を開きてその封印を解くに相應しき者は誰」(ヨハネ黙示録五・二)であらうか。私は此の事を思ふ時、今より四百年前の近世創始の當時を考へる。そこに我が明治維新史と何者か或る共通のものを發見する。

當時は所謂文運復興期であつた。永く墓中に埋没せられたギリジヤ古典が發見せられ、嘗て燦爛たりし古代の文化と深遠なる哲學とが再生し、人々は之に由つて時間にして悠久なる過去に廻り始め、

そこに新世界觀を得、當時の狹隘なる形式的教會制度に不滿を感ずるに至つた。又當時は所謂發見時代であつた。コロムブスの新大陸發見、バスコダガマの喜望峯迂廻等あり、空間に於ても人々の眼界は大に開け、活働の野を歐洲の外に求むるに至つたのである。

然し乍ら、形式尊重の中世の打破、自由の近世の創始は希臘古典の研究、即ち學問の結果、又新大陸の發見、即ち事業に因つて來らず、實に人間の深奥なる靈魂の内部に於ける大光明の發見に因つて生じた。即ち近世史はルーテルの宗教改革を以て創まつたのである。

丁度我が明治維新史の根本的原動力も亦その如くであつた。之は西洋の學問の研究にあらず。又その政治、軍事、産業の模倣採用ではなかつた、若し然らば、東洋の諸邦悉く我が國の如く發達した筈である。然るに他國が萎靡沈滯、獨立を失ふに至つた時、獨り我が國民が彼の長を採つて自家の物とし、我が國をして如此發展せしめたのは粹然として神州に鑽まりし天地正大の氣、即ち大和魂、武士道に外ならなかつた。之こそは我が國民が誇るに足る我が國の精華である。此の者を無視して、明治維新史は説明出來ない。

然り而して、ヘーゲルが宗教改革について云つたやうに「世の人は皆アメリカに印度に財寶を求め、又地球を廻つて日没を見ない地上の王國を建設しやうとしつゝ、あつた際、獨乙チユリーングンの森に、一寒僧は眼に見ゆる空しき形骸を外にして、嘗て弟子たちがアマタヤのヨセフの石墳中に探し求めて得なかつたキリストを、聖書の中に發見し、純の純たる獨乙魂の中に之を迎へ奉つた時、密に近世が創まつたのみでなく、獨乙國の基礎が据えられたのであつた。

# 聖書之眞理

第五十三號

昭和七年二月一日發行

## 基督者の不和

主 筆

基督者は愛を標榜する。神の愛に信頼して生き、自らも人を愛せんとする。此の事を人生の基本とする者である。愛が中心であるからは、基督者の間に協同一致の生ずる事は必然であらねばならない、教會とは元來かゝる愛の團體を指して云つたのである。若し愛なくば、名は教會と雖も教會ではない。又無教會を唱へ、眞の教會は我に在りと云ふとも、眞の教會はそこにはない。

古來基督者の間に不和が絶えない。殊に「神學者の憎惡」と云ひて、基督教の専門家、傳導師の

間には、世にも見られない憎惡がある、惡口がある。排斥がある、陥穽がある。昔あつたやうに今も尙ある。愛の交際であらねばならぬだけ、それだけ醜惡である。最後の審判の日に眞先に詛はるべき者は多分此の輩であらう。

何故然るか、解答は至極簡單である。曰く、彼等は基督者と云ひつゝ、眞に福音を信受して居ないからである。「異なる福音に移り」ゆいたからである。パウロは激しき言を以て云つた。

我は汝らが斯くも速かにキリストの恩恵をもて召し給ひし者より離れて、異なる福音に移りゆくを怪しむ。此福音は福音と言ふべき者にあらず、たゞ或る人々が汝らを擾してキリストの福音を變へんとするなり。されど我等にもせよ、天よりの御使にもせよ、我らの曾て宣傳へたる所に背きたる福音を汝らに宣傳ふる者あらば詛

はるべし。(ガラテヤ書一・六以下)

何人と雖も、眞實の福音を信受する者は深甚なる神の愛を経験する。パウロと共に「言ひ盡し難

き神の賜物につき感謝す」(コリント後書九・一五)る

者である。神の賜物の第一は、未だ嘗て経験した

事のなかつた心のなごやかさ、「萬人の思念にす

ぐる平安」(ヒリビ書四・七)である。第二は大なる歡

喜と希望と愛である(ガラテヤ書五・二二)。若し我等

の心に此の平安なく、却つて焦慮、不安があり、

大なる歡喜なく、人に對して愛なく、却つて不平、

不満、憎悪があるならば、其の者は斷じて「福音」

を信受して居る者ではない。眞の福音のあるところ、

必らず平和、歡喜、感謝、愛がある。

大ていの傳導師は皆「純福音」を説くと自稱す

る。その説くところが「福音」であるか否かのテ

ストは容易である。説者自ら先づ神の大なる愛に

感激し、心の奥底まで平和と歡喜にひたり、大なる希望に輝き、人よりは何の求むるところなく、却つて何物か己のものを人に與へんとする愛に溢れて居るか否かがそれである。

福音は人の心をしてかくまで變化せしめるものである。そうでなければ天地萬物の創造者、其の完成者たる神の御言ではない。パウロが云へる如く、「此は福音と云ふべき者にあらず」である。

基督者の間の眞の一致、愛の交際は我等各自が、私が、そしてあなたが、此の如き強烈なる眞の「福音」を把握し、心に充ち足れる喜悅がある時に生ずる。其の他の如何なる手段又は方法によつて生じない。此の福音のみが眞實世の救、萬國永遠の平和の基礎である。而して基督者は其の證明者たる責を負ふ者である。然かも基督者の現状を見よ、果して眞福音が信受されて居るか。

# 世の悲慘と神の存在

江原 萬里

## 問題中の大問題

若し世に神はありとせば、神は何故此の世を現在あるが如き不幸の世のまゝに之を放擲し給ふのであるか。何故此の世から一切の害惡を取除き、此の世を眞の樂園と爲し給はないのであるか。

否、若し眞に神ありとせば、神は何故始めから、斯の如き不完全なる人間を創造し給ふたのであるか。或は無情冷淡なる、或は激情兇暴なる、或は弱くして善き事を願へども之を爲し得ず、義しき事を行はんと欲して却つて惡を行ふ。神は無能無知無情にして、此れ以上の人間を創造し得ず、感情の衝突あり、憎惡、嫉妬、鬭争、掠奪、殺人以上の世を創造する事不可能なのであるか、又將來

も此の人間とその世界とを完全なるものになし得る智慧も能力もないか。若し然らば神は神でない我等は之を神として信賴するに足らない。

是れ神を信ぜんと欲して信じ得ない、多くの人々の疑惑である。まことに此の世に種々の害惡の存在する事實程、神を信じ度いと思ふ者に取つて又神を信じて居る者にも大なる障礙はない。是れ問題中の大問題である。

## 神の智慧と能力

否、神は人智を超越する深遠なる智慧を有し、爲さんと欲して爲し得ざる事なき全能者に在し給ふ。

君の狭い薄暗い、埃だらけの心から、悠々浩湯たる大天地に出て見よ。誰か天空に爛干として輝く無数の星辰を眺めて、宇宙の洪大無邊、其中に無限の精力を包み、無盡の富を藏する事を想は

ない者があろうか。誰か、朝日に勾ふ山櫻花、夕陽に映ゆる満山の紅葉を望み見て、天然の美觀に打たれない者があろうか。一切の物に嚴然たる法則あり、秩序あり、春夏秋冬、其の期を違へない、之を思ふて我等は畏敬の念に満つるではないか。

もろもろの天は神の榮光を顯はし、  
穹蒼おほそらはその御手のわざを示す。

この日ことばをかの日につたへ、

この夜知識をかの夜におくる。

語らす言はずその聲きこえざるに、

その響は全地にあまねく、

そのことばは地のはてにまで及ぶ。(詩一九)

誰か、此の大宇宙を以て洧亂の巷と見る者があろうか。偶然に生じ、自分勝手に存在して居るものと見られ得やうか。之こそは、實に神が無限の能力、無窮の智慧を以て、之を創造し、維持し、攝理し、且つ之を完成し給ひつゝあるものではないか。

いか。全知全能の神こそは、如何なる望遠鏡も達し得ない宇宙の彼方、如何なる顯微鏡も見出し得ない微生物の奥底までも之を知り、之を支配し給ふのである。彼は全宇宙の第一原因であり、終局目的であり給ふ。「萬の物の歸するところ、萬の物を造りたまふ所の者」(ヘブル書二・一〇)である。

### 造られし者の至上善

此の世界と、我等人類とは、悉く神が無限の智慧と能力とを以て創造し給ふたのである。而して萬物の中、神が最も心をこめて創造し給ふたものは我等人間であつた。神は之を地上に在る凡ての物を治めしめんとて「その像かたちの如くに人を創造つくろたまへり」(創世記一・二七)とある。

人は如何なる者なれば、之を御心にとめ給ふか。人の子は如何なる者なれば、之を顧み給ふか。汝これを御使よりも少しく卑うし、光

榮と尊貴とを冠らせ、萬の物をその足の下に服はせ給へり。  
 (ヘブル書二・六以下)

神は人に萬物中の至上善を豫期し給ふたのである。

然るに此の世界に在つて、凡そ善と云ふ善のうち、我等が思惟し得る最高至上の善は、我等が無病息災、無事平穩、安樂滿腹の善ではない。眞の善は純道徳である。家貧しくとも孝子節婦の行は遙に家富み物豊かなる者の生活よりも善である。身を殺して仁をなす者、義を取る者、國を愛する者の生命は安樂に一生を送りし者の生命より遙に貴い。聖人君子の生涯は人類の光榮である。無私なる眞の愛こそは眞の善である。

否、我等の思惟し得る至上善は神御自身である。「善き事につきて何ぞ我に問ふか、善き者は唯ひとりのみ」(マタイ傳一九・一七)、即ち、「萬の物の歸する所、萬の物を造り給ひし所」の神のみが善で

ある。正義、愛、智慧、能力の根源であり給ふ神以外に善はない。されば人間としては全く己を無くして、此の神と偕に生き、その御意ごいにのみ服従する事、本心から神を愛すること、此以外に人間の至上善はない。

されば、唯一の善であり給ふ神が唯一の善なる己を終局の目的として此の世界を創造し、之を維持攝理し、之を完成し給ふならば、人をして眞に此の唯一の善なる神を愛するやうに創造し給はねばならない筈である。

### 自由は愛の根本條件

然るに、凡そ愛が眞の愛であるには、それは愛する者が本心から喜んで自發的に愛するものではない。他から強制されて不承無精に愛する事は不可能である。器械のやうに、只規則に従つて他の人に益ある行動をなしたとて、それ

は愛ではない。眞の愛は自由なる愛である。あらゆる苦難に耐え、誘惑に打ち克ち、自己の勞苦を顧みず、死をだに辭せざる犠牲の愛こそは眞の愛であつて、その愛は愛する者の自由、自發をその根本の條件とする。

されば凡そ自由から出ない愛は眞の愛ではない。惡をなし得る可能性を有し乍ら、然かも惡をなさず、却つて善をなすところに、眞の善がある。賄賂を取り得る可能の位置に在つて、然かも之を退け、義しきを行ふてこそ、眞の正義がある。その如く、人を憎み怒る可能性あり乍ら、憎まず怒らず、心からその罪を赦し、再び之を思ひ出でず、却つて己を憎む者を自由に愛してこそ、愛は愛である。

されば、眞に愛する者には、何よりも先に、自由が必要である。自由なきところに愛はない。凡ての道德はない。神は全能者なりとて、人に此の

自由を與へず、之を機械の如き者に創造し、然かも尙之をして本心から他を愛し、又自發的に唯一の善なる神を愛するやうになさしめ給ふ事は出来ない。故に神は此の世界を最美に創造し完成し給ふために、被造物中の最高の被造物たる人間に、心から神を愛せしめんとて之に自由を賦與し給ふたのである。

### 自由の濫用

されど自由とは自由の事である。他より強制されない事、自分で自發的に自分の目的を定め、之を達成するため自分の欲する手段を採ることである、故に人が自由であると云ふことは、常に善をなすこと、義しき事をなす事にのみ自由であるのではない。又惡を企て、不義を行ふ事にも自由であることを云ふのである。人は神から此の自由を與へられて此の世界に生れ出たのである。それは



正宗の銘刀である。邪惡を切るに鋭いと同時に、使用の方法によつては己を殺すに至る。

人は此の自由を濫用した。悪用した。之を以て心から神を愛する愛に用ゐず、却つて己を愛した而して神に背き、神の御意なる道德律を破ることに使用したのである。

神は其の創造し給へる世界をして最善最美なる物たらしめんがために、人類を創造し、其の本心に神を愛する愛、その御意なる道德律を心から喜ぶところの服従を目的として人に自由を與へ給ふたのに、人は此の自由を濫用、悪用して、道德を破り、神を愛せず、自己を愛する者となつて、現在あるが如き淺間しき世となつたのである。

此の世界のあらゆる不完全、不幸の原因は實に、人の神に對する背戻の罪である。罪は人の自由意志に由つたものであつて、神の創造ではない。されば、此の世の一切の不幸の責任は人に在つて、

神にない。人の自由の濫用に在る。故にそれは各個人と無關係なる社會事情に由らない。環境の不利に在るでもない。人が各々有する自由選擇の結果、邪惡に自ら求めて陥つたのである。世の不幸の根本原因は實に人の意志の奥底に在る病患である。エレミヤは云つた。

心ほご僞るものは亦あらず、

癒し得ぬまで病みてあり。

そもこれを知る者は誰ぞ(一七・九)。

社會の腐敗の根本原因は人間の心の邪惡に在る。その自由意志の腐敗に在る。此の病患にして癒えざる限り、世界は今後幾千萬年を経過し、巨億の富を産出し、燦爛たる文化を創造するとも、その不幸不義は已まず、決して完全なる黄金世界は現出しなない。否、その將來は争鬪、掠奪、破壊あるのみである。

## 罪の正體

されば此の意志の邪惡、腐敗、病患は之を其の時代時代の道徳發達の程度、社會進歩の事情、又は周圍の人々との比較に由つて判定さるべきではない。何となれば、人は何人も自分の道徳的水準を自分で低下せしめ、其の水準よりして自己を義人と考へる事が出来る。自分は少なくともあの者程賄賂を取らない、あの男程遊ばない、あの人のやうにうそをつかない、等々と云ひて、さも自分は聖人君子の如くに思ふ者である。然かも斯る徒輩程其の意志が腐敗し、病に罹つて居る者はない。前に述べし如く、人は神が神を目的として、「その像かたちの如くに人を創造つくたまふた者である。人が眞に人らしくあるか否か、眞に人として義しくあるか否かは、時代時代の道徳的標準に由つて判定されない。人を創造し給ふた神の永遠の御目的に

照して、之を判定さるべきである。此の標準に照されて、萬世の後までも至聖として尊敬せられるパウロは、「我は罪人の首かしらなり」と叫べん。人が神に近づくに従ひ、益々強烈に感ずることは、神に對する己が罪である。罪とは之である。

われはわが愆とがをしる、

わが罪はつねにわが前にあり、

我はなんぢ（神）にむかひて、

獨たゞなんぢに罪をおかしたり（詩五一）

天地萬物の創造者に對して、然り、彼に對してのみ、我等は義でない。如何に辨解するとも我等の心は邪惡である。欲するところ、行ふところ、天地大道に反し、自ら智さとしとして然かも愚を敢てなしつゝある。

されば世の一切の不幸の根本原因は、神がないためでなく、神が無能無知無情のためでなく、實に我等が最高の善たる神を心から愛し、その御意ごい

に自發的に喜んで服従せず、そのために、神から賦與せられた自由意志を濫用した結果に外ならない。即ち、神に對する罪にある。之を我等の意志それ自身について云へば、「癒し得ぬまで病める」その疾患に在る。

### 神の榮光

然らば、神は人を創造し、之に自由意志を與へ自發的に喜んで神を愛し、その御意ごいに服従することに由つて、最善最美の世界を出現せしめんとし給ふた神の最初の計劃は、人間の邪惡に由つて永久に失敗に歸したか。此の世界は神の大失敗の記録にして、神は全能でなく、又人間創造の際かゝる失敗を見透はす全知はなかつたか。否、否、神は正しく全知であり給ふ。

エホバ宣はく

わが思はなんぢらの思とことなり、

わが道はなんぢらの道と異なる。

天の地より高き如く

わが道はなんぢらの道より高く

わが思は汝らの思より高し(ヘイザヤ五五・五)

神は豫じめ之に備え給ふた。「時満つるに及びては神その御子を遣し」(ガラテヤ四・四)給ふた。

又神は正しく全能であり給ふ。人の自由意志が癒し得ぬまで病みて腐敗し、自らの力を以て自己の意志を正しくし、潔め、眞に正義に立ち、正道を歩み、心から神を愛し、神に服従する事の全く絶望となつた時、神は新に救の道を啓き、神の無條件なる恩恵により、然かも、それは我らの自由なる意志、即ち、信仰に由り、心から神を愛し、感謝し、神に服従する事を無上の善と思惟するに至らしめ給ふた。これ主イエス、キリストの十字架上の御聖業であつた(一月號拙文、キリストの十字架参照)(これは私の十字架觀の精髓である。)

この故に、今やキリスト・イエスに在る者は罪

に定めらるゝことなし。キリスト・イエスに在る生命の御靈の法は、なんぢを罪と死との法より解放したればなり。肉によりて弱くなれる律法の成し能はぬ所を神は成し給へり。即ち、己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣し、肉に於て罪を定めたまへり。これ肉に従はず、靈に従ひて歩む我らの中に律法（敬神愛人の義の完うせられん爲なり（ロマ書八・一以下）

こゝに神の愛が顯はれた。神の愛われらに顯はれたり。神その生み給へる獨子を世に遣し、我等をして彼によりて生命を得しめ給ふに因る。愛と云ふは、我ら神を愛せしにあらず、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のために宥の供物となし給ひし是なり。

（ヨハネ第一書四・八一—一〇）

此の愛に感じて、我等は眞に神を愛し、その誠命を喜び、人を愛するに至る。

愛する者よ、斯のごとく神われらを愛し給ひたれば、我らも亦たがひに愛すべし。未だ神を見し者あらず、我等もし互に相愛せば、神われらに在し、その愛も亦われらに全うせらる。

（四・一一以下）

かくして神に對する人間の罪に因る世の罪惡、混亂、不幸はやがて神の絶大なる愛、智慧能力に由り一掃せしめられる時が來るのである。キリストを信する者には此の確信がある。故に世の騷擾、その不幸悲慘を見て神を疑ふ事はない。己が罪を嫌惡すると同時に益々神に信賴する。故にキリストを信ぜずしては、此の世界は絶望であり、宇宙は謎であり、神の存在に確固不動の信念をもち得ない。

さればキリストとその十字架なき基督教は基督教でない。社會的基督教と云ふ如きは、マルクス主義的社會科學にも劣る「此の世の智慧」である。

## エレミヤ記の研究 (六)

## 北よりの禍

江原萬里

## 幻影とその性質

エレミヤはユダの農村宗教の墮落と、それにもまして暗黒である、首府エルサレムの社會的道德的腐敗とを親しく觀察して、イエラエルの民は其の心全く神から離れ、神の民たる資格なき事を確信するに至つた。而して神は此の民の契約不履行を罰するために、此の國を滅ぼし給ふ事は當然である事を心から是認するに至つた。國の將來は只滅亡あるのみ。是嘗て彼が神に召されて預言者とせられた時、直接受けた啓示であつた。又彼自らイエスラエルの民の有様を了細に觀察するに及んで到達した結論であつた。

預言者は神の御言を鵜呑とし之を鸚鵡のやうに繰返す者ではない。その預言は神の直接の啓示であると同時に、又預言者自身の體驗の聲である。エレミヤは眞實神と相交つて、眞宗教の如何なるものであるかを身自ら經驗した。故に彼はそれに照して同胞の宗教の實狀を親しく觀察し、如何に皮相であり、空虚であるかを知り、其の破滅を確信するに至つたのである。彼が神に對して誠實であればある程、同胞の神に對する不誠實に良心が痛んだ。又彼が同胞を愛すること深ければ深いだけ、その墮落と彼との間の懸隔絶疎のために惱んだ。同胞の罪を見るだに、聞くだに、彼は居堪えなかつた。そして此の感情より推して、彼は神の御心を察した。同胞の罪に對する彼の苦痛は遂に義憤となつた。此の義憤を通じて、彼は神が其の民の罪に對する御怒の如何に強烈であるかを思はざるを得なかつた。これを以て嘗て彼が沸き立つ

た鍋が、北風に煽られて、南方に煮え溢れつゝあつたのを見て、其の時感じた幻影、即ち神が此の民を罰するため、北から禍を招き寄せ給ふとの驚くべき啓示(一・一三)は、四圍の状況に照して事實であると確信するに至つたのである。

抑もイエスラエルの眞の預言者の顯著なる一つの特色は、かやうな幻影を見ることに在つた。イザヤが預言者として召された時、彼は神殿に於て高く上れる神の御座(くら)の下から、セラピムが聲を合せて「聖なる哉、聖なる哉、聖なる哉、萬軍のエホバ」と唱ふを聞き、神殿は揺るぎ、煙が神殿のうちに満つるのを見た。アモスもエゼキエルも其の他の預言者も、悉く幻影を見て神の眞理に接した。それに由つて預言者として召されたのである。

此の幻影は、現代の心理學で云ふ錯覺又は幻覺の如き病的現象ではない。此の中に深い道德的且つ宗教的意味が籠つて居た。幻影を見た預言者の

理性は鈍らず、却つて益々鋭化し、其の良心は敏感となり、其の靈性は高められたのである。

此の幻影は又事實預言者がその肉眼で見、肉の耳でその聲を聴いたのであつて、或る者が想像するやうに、決して預言者の宗教觀の詩的表現ではない。又預言者が想像の翼を張つて天空を飛翔し、自ら書いた想像畫でもない。それは全く自己の理智の産物でなく、何者が自己以上の者が突如として之を預言者の眼前に提示し、而して預言者はありありと己が眼前に之を見たものである。

然かも此の時預言者は決して恍惚忘我の境に陥らなかつた。彼は幻影を眼にて見、その聲を耳にて聞きつゝ、自己の存在の意識を喪失せず、その理智の働を益々鋭くして幻影の道德的宗教的眞意を理解した。されば此の幻影は精神病者の幻覺と全く異なり、心理學より云はゞ、人間の意識界の中に湧出し、且つ之と駢立した潜在意識の世界で

あつて、多分それは永遠の世界の一部であらう。

さればエレミヤの見た沸々と騰き立つ臺所の鍋は實際の鍋であつた。エレミヤはその北風に煽られて煮え溢れやうとする實際の有様からして、其處にありありと慄慄なる兇敵が北から現はれ、ユダの國中を掠奪する光景を幻に見、且つ萬國民を統御し給ひつゝあるエホバが己が民の背反を罰するため之を爲し給ふと云ふ其の眞意義を悟つたのである。此の幻影を見た事それ自身、エレミヤは己が神に召されて預言者となり、その預言する亡國の預言は自己の空想でなく、虚偽でなく、神の御言であり、やがて事實となつて歴史に實現するとの確固不動の信念の根據となつたのである。

### スキタイ人

既に農村と都市との腐敗甚だしく、神の刑罰の避け難い事を確信するに至つたエレミヤは、爰に

於て眼を上げて遙か北方の情勢を觀た。果然、彼は諸國民の動搖の中に、只事ならぬ神の御手の跡を發見した。神が預言者を召し給うて來らんとする審判を預言せしめ給ふ時には、實に時の徴しるしは既に歴然として靈眼にはあらはである。一葉落ちて天下の秋を智る。是れ一葉の落つるは秋既に天心に入るからである。

當時の世界帝國アッシリヤはその最後の大王アシール・バニ・ボールの死と共に土崩瓦解に瀕し、之に隸屬して居た北方のメデア及び南方のバビロンとは協力して、アッシリアに背いた。メデア王キヤクサレスはアッシリアの首府ニネベを圍み、バビロンの守將ナゴボラサル(ネブカドレサルの父)は南方に獨立國を建てやうと企てつゝあつた。アッシリア帝國の衰亡はユダにとつては、内憂外患を去り、獨立發展の豫徴の如くに見えた。

然るに此の時から約半世紀以前、カウカサス東

部の地方を荒して居たスキタイと稱せられる慄悍なる馬賊が、次第に東漸してアツシリア帝國の内に侵入して來た。此の民族の支族であるバンダルとゴスとは、それから數百年の後、ロマ市に侵入して遂に西ロマ帝國を滅ぼした者である。今やメヂヤ軍に首府を包圍されて瀕死のアツシリアは、此の時此の蠻族と和議を結び、彼らをしてメヂヤ軍の背後を襲はしめた。メヂヤ軍は之がため遂に一時包圍を解いて退却するの餘議なきに至つた。スキタイ人はそれ以來到るところに掠奪を行ひ、南方に轉じてエジプトの國境まで來たが、エジプトの賄賂を得てか（ヘロドトス）、又は之に撃退されたか（近代の研究）、地中海の海岸を通つて北方に退いた。

此の蠻族襲來の噂がユダに傳はるや、人心洶々として安せずあつた。エレミヤは此に由つて嘗て見た煮えたつた鍋に由る北からの禍の幻影の今や

事實として具現し來たことを感じた。スキタイ人の掠奪の慘禍を想像して、彼の詩的天才は振ひ動かされ、こゝに數聯のスキタイ詩となつた。

此等の詩は彼の激動せる感情の其の儘の流露である美はしい叙情詩であつて、其の儘神の御言の預言と云ひ得ないであらう。何となれば此の詩には餘りにエレミヤ自身の感情が溢れ、其の内容は宗教的道德的と云ふよりも、寧ろ美的であり感情的である。

エレミヤの此の詩を讀んで嘆賞する事は、如何にも彼の詩的想像力が豊富である事である。未だ正體の明白でない、ぼんやりした蠻族來襲の噂からして、かくもまざまざとその來襲の恐怖、掠奪の有様、國の荒廢を書き出した彼の優れた詩的表現力、同胞の慘狀を想うて之がために嘆くその同情、その悲痛の強烈、その詩の文辭の華麗、優美は舊約文學の精華である。



三 視よ、一つの民北方より来る。

地の極より民襲ひ来る。

三三 彼らは弓と槍とを携へ、

残忍にして憐を知らず。

喊聲は海の如く鳴り轟く、

彼らは皆馬に騎れり。

二四 我ら其の風聲を聞き、

我らの手は萎へ凋ひぬ。

恐怖我らを虜にし、

産みの如き苦惱あり。

二五 なんぢ田畑に出る勿れ、

大路を歩むこと勿れ。

そこに敵の劔あらん、

四方八方是恐怖。

二六 我が民の娘よ、

粗布を纏ひ、

灰のなかに轉ろび、

獨子を失ひし者の如くに嘆け。

あらん限り泣き悲しめ。

そは俄かに、

掠奪者來れば。(第六章)

彼等は原始的粗野なる北國人であつて、異様の言語を語り、残忍にして人を殺すことを虫を殺す程にも思はない。常に馬に騎り、弓と槍とを携へ、馬上に生活し、妻子は兵糧と共に後方から車で運ぶ。宛かも暴風のやうに田畑の上を馳せ、人家を掠奪し、婦女を姦し、餓えたる狼、吼ゆる豹のやうに町々を繞つて市民を怖れしめる。此の野蠻人の來襲を聞いて、エレミヤはユダの罪に對する神の刑罰の到來を感じたのである。彼の詩的想像力は既に來襲され、掠奪されたもの、如く、その慘禍の悲痛を歌ふ。

スキタイ來寇の幻影

五 ユダとエルサレムとに宣へ、

彼等に告げて聞かしめよ。

物見の者の叫

國中にラツパを吹き鳴らせ、

聲を限りに叫べかし。

「集れ、我ら難を

圍ひある町に避けん」と

六 汝合圖の旗をシオンに振り、

取る物も取あえずこゝを去れ。

そは我れ北より禍を來らせばなり。

あ、大なる荒廢。

七 獅子は叢くまむらより出で來る。

國々を掠む者。

彼は起つ、己が所を出で立てり、

汝の國を荒さんがため、

なんぢの町々は燒かれ、

住む者なきに至らん。

八 此の故に汝ら粗布あらたを纏ひ、

聲を擧げて哭き悲しめ。

エホバの烈しき御怒は、

我らより去らずあれば。

襲 來

一三 視よ、雲霞の如く彼ら來る。

その戰車くるまは颯風はやての如く、

軍馬の驅るは驚おどよりも疾し、

あ、吾は禍、吾滅びなん。

一四 エルサレムよ、汝の心を洗ひ潔めよ、

若し汝救はれんと願はば。

いつまで汝の奥底に、

悪しき念を蓄うか、

敵 近 づ く

二五 聞け、ゲンよりの傳令使、

エフライムの丘よりの凶報を。

民を警しめよ。「視よ彼等來る」と、

エルサレムに告げ知らせよ、

遠き國より約出で來り、

ユダの町々に向ひて吼ゆ。

預言者の懊惱

一九 わが腸よ、わが腸よ、あ、此の痛み、

あ、わが胸の戸よ、

我が心は荒て嵐の如し。

われ黙し難し。

そは軍鼓響き、

戦鬪の雄たけびを聞きたれば、

二〇 破滅の上に又破滅、

國は荒さる。

俄かに我が天幕は潰れ、

瞬く間に我が幕は破る。

三二 いつまでかわれ烽火を見、

ラツバの響を聞くべきか。

荒 廢 の 幻 (以下幻の頂上、豫言文學中)  
最優美 最強烈の詩

三三 われ地を見しに形虚しく、

天を仰ぐに光明なし

三四 われ山を見しに皆ゆるぎ、

凡ての丘は震ひ動けり。

三五 我れ見しに人もあらず、

空の鳥は飛び去りぬ。

三六 我れ畑を見しに荒地となり、

凡ての町は毀たれぬ。

侵略の恐慌

三九 騎兵と射兵の喊聲に、

國中皆逃げまどひ。

洞に叢に身をひそめ、

岩の上に攀ぢ登る。

町々は皆空き殻となり、

そこに住む者一人だになし。

エルサレムの悲鳴

三〇

萬事休せり、滅ぶる者よ、

今や何をかなさんとする。

紅の衣を身に纏ひ、

金の飾りに身を粧ひ。

口を大きく化粧すとも、

その粧よそはは無益なり。

汝の戀人汝を卑しめ、

汝の生命を求むなり。

三一

初産婦の産みの苦しみ、

われその如き苦惱を聞く。

シオンの娘の叫び聲、

手を伸べて嘆き悲しむ。

「あ、われは禍、我が魂は

我を殺す者の足許に斃る」と。

(第四章)

然るに此のスキタイ人はエジプトの國境から海

岸通ひに北に退き、ユダは遂に事なきを得た。神

はユダを恵み、之を外敵の侵入掠奪荒廢から守護

し給ふたやうに見えた。神の御怒に由り國は滅ぶ

と預言した、エレミヤは國人に虚偽を語つたもの

、如くに見えた、彼は國人に不信用となり、不評

判となり、嘲弄の標的となつた。エレミヤ自身心

のうち神に欺かれたかの如く感じた。彼は此の

後も神から預言を強られて預言をして、度々此の

苦しい經驗をした。

あ、主よ汝は我をすかし給ひ、

我は汝にすかされまつりぬ。

われ日々に物笑となり、

人皆われを愚弄するなり。

エホバの御言は我が不評、

ひねもす我が嘲りとなる。(第二十章七節以下)。

# 戦 争 論

藤 本 武 平 二

いふ迄もなくキリストは戦争其他凡べての闘争に反對せられた。然るに、基督教徒は十字軍を起して再三聖地の奪還を試みた。又内村先生は嘗て日清戦争を以て義戦なりと叫ばれた。戦争是か非か。吾等基督教徒は今回の滿洲事變を何と見るか。聞く處に據れば滿洲の地に在る教會の多くは内外人共に主戦論を唱ふと。今吾等クリスチャンは戦争が何の故に起るか、その由つて來る所を檢討して、現に發生せる事變並に將來發生する事あるべき戦争並に闘争に對する正當なる態度を定めなければならぬ。

全能なる神が天地萬物を創造し、そこに生物を造り給ひし時に抑もの争ひの種子は播かれたのである。生物が神の祝福を受けて神の御手を離れ進

化の道程を辿るべく地上に現はれた時、生物は争闘を始めたのである。生物はその物質的生命を維持しその進化を遂げんがために自然法則即ち、適者生存、自然淘汰、生存競争、優勝劣敗の鐵則の許に繋がれた。これは物質的生命を保たんが爲めには絶對的に必要な自然法則であつて、人類も生物の一つとして、この法則の許に在るものである。故に適者は生存し、不適者は淘汰さる、又生存の爲めに人類は相互に或る他種動物と闘争し、優者となつて始めてその存在を續け得るのである。

滿洲は日本民族の生命線であるといふ、日本民族死活の問題であるとは誠に日本人の正直なる告白であらう。地上に生存を許さるゝ以上、膨脹し行く國民が外界へ發展するは當然であらう。而してその膨脹が阻止さるゝ時、如何ともする能はざる國民の内的生命力が大なる爆發をして戦争となるは免る能はざる處であらう。民族には夫々その

時期により消長がある、世界歴史は實に民族の消長史であり、國と國との戰爭物語である。發展し行く國民は萎縮退化する國民の領土を奪はんとし、て茲に戰爭は開かれるのである。故に日本民族が弱き支那と戦ひ滿蒙の地を得んとするは、生物界に於ける自然法則より見て誠に當然の事といひ得るのである。

國際聯盟とか不戰條約とかを如何に強調しても到底この生物界の自然法則を破る事はできない。民族がその消長なきに至り進歩發達を止むる時或は戰爭は止み平和條約は嚴守されるであらう。人類は生物の一つとして物質的生命の保持者たる限り天然法則の許にありて優勝劣敗するを免がれないのである。

生存の爲めの戰爭だけであつたとしても、この世に戰爭は絶えないのであるが、人類は單に一動物として生存するのみでなく、同時に神から良心

を與へられた道德的觀念を有する生物としての生存を營むものである。神は人を特に祝福して自らに象つて造り給うた、故に善惡を知り道德律を辨へ、正義不義を判別する、従つて人類は國家的社會的生活を營むに際し、他の不義を攻め、戰爭に訴へても正義を護らんとする。而して、人が正義の爲め眞理の爲め一度び立つや極めて眞劍であつて身命を賭するも敢て厭はないといふのが普通である。

彼の南北戰爭の如きは實に奴隸を解放せよとの崇高なる正義の念に驅られたる義戰であつた、今日まで戰はれたる多くの戰爭は正義の爲めと稱して行はれた侵略戰爭である。時には一宣教師の虐殺を口實として戰はれたる略奪戰であつた。滿洲事變は實に支那が日支條約を破りし不義の故に戰はれつゝある戰爭である。故に正義の爲めの戰爭是なりとせば勿論この戰は神の前に肯定さるべき

ものである。

然し思はなければならぬ、若し不義に對する戰爭が凡べて肯定さるべきものとすれば、世に不義を侵さざる國家は一つとしてないであらう。彼の英國を見よ、彼は印度、ビルマを攻略して其の膏血を搾り、鹽稅數億萬金を奪取し、又南阿自由國を滅ぼしてその金鑛を手に入れ、又阿片戰爭を起して支那人に阿片を強賣した。濠洲は廣漠たる土地を僅か數百萬人にて專有し我が移民を絶對に拒否して居る、斯かる不義は米國も亦侵しつゝある。世界何處にか眞に正義の國あらん。然り日本獨り神の前に正義を主張し得べけんや。想ひ見よ、若し不義の國は飽く迄も戰爭によつて糾彈すべきものであるとするならば、印度は英國と戦ひ、南阿亦英國と戦ひ、フキリツピンは米國と戦ひ、日本は支那及米國と戦ひ、更に濠洲と戦はざるべからず、然り朝鮮も亦日本に對し戰を挑むであらう。

パウロは叫んだ「義人あるなし、一人もあるなし」と、然り「義國あるなし、一國もあるなし」ではないか。若し『汝らの中罪なき者まづ石を擲て』とのイエスの言葉に従はずして、不義なる國が不義なる國を攻むる事を得べくんば、恐らく戰爭は世の終はるまで熄む事を知らないであらう。

世界の人々は期待した、列強の締結した不戰條約と國際聯盟とは最早や戰爭の發生を完全に防止し世界は平和を樂しむであらうと。しかし爲さざるに優る平和への第一歩であつたに過ぎない、民族に消長ある事を忘れ専ら現狀維持を固執する國際聯盟規約に自然法則への違反あり、何を期待し得よう。滿洲事變に乗り出した國際聯盟が何等の貢獻すら爲す能はず、唯その體面を糊塗するに汲々たる如きは誠にその所といふべきである。

現狀維持といふ、現狀維持を理想として不戰條約を結びたれば世界は最早や戰爭の事を語らざる

べしと。何たる錯誤ぞや、現状維持といふが、現状維持は世界人類の爲めに果して幸福の道なりや。

白人が有色人種を壓服してその物質的慾求を充たす事が果して正義の道なりや。若し不戰條約と國際聯盟とが白人の過去に侵し今日尙ほ侵しつゝある不義と罪惡と搾取とを今後も尙ほ繼續する爲めの保證となるに過ぎざるものとせば、斯かる正義と眞理の道に脊戻する規約に何の力があらう。

平和々々といふ、誠に望まじきは平和である。然し乍ら平和は正義と眞理とに優りて望まじきものであらうか。正義の宮殿に於ける一日は平和の牢獄に於ける不義の千年に優る幾倍ぞや。

嗚呼世は冷酷なる自然法則と正義とのため何時までも戦争を忘れ得ないであらうか。神が天地を創造して、被造物に物理的、化學的性質を與へ給ふや誠に全能であり給うた。然るに生物を造つて物質的生命を創造し給うや適者生存、自然淘汰、

生存競争、優勝劣敗の自然法則をその進化の爲めに置き給うて争闘の源を作り神は大なる失敗を爲し給うたのであらうか、而して神は又生物の中の人類を選びて之れに良心を與へ正義の觀念を起さしめて不義に對する戦争の源を作つて神は再び大なる失敗を繰り返し給うたのであらうか。

然り神にして若し天地を造り生物を作り、人類を作り之に良心を與へ給ふのみにて放任し給ひしならば、神は天地創造と宇宙完成の大事業を失敗し給うたのであらう。然し神はそのまゝに放任し給はなかつた、神の最高最美のものは遂に世に與へられた、その獨子イエス・キリストは與へられたのである。キリストを受けずんば世はいつまでも戦争を思ひ、キリストを受けて世は最早や戦争を忘れるのである。



## 柏 木 通 信 (第十四信)

齋 藤 宗 次 郎

柏木の近状 ○内村サン：小包ですよ！其聲に應じて出

て見れば積み置かれたる七個の大荷物、直ちに編輯室へと運び上げられた。開いて見れば驚嘆敬服、悉く會て恩師の諸方に發せられし貴重の書翰であつた。更に鄭重に眼を注げば、一々原稿紙に筆寫し諸種の要項を書き込んで條理正しく整頓せられしものであつた。婦人の重責を擔ひつゝ、此繁務に當られし美代子夫人に感謝の辭なきを得なかつた。

予は數日を用ひて點檢整理す間に屢々其内容文面に目觸れ其愛心の濃やかなるに感激して獨泣いた。此透徹なる愛は何處より發せしものなるか。そは決して四書五經の素續、札幌農學校の實驗室、アマスト大學の神學講義、乃至はカントの哲學、ダーウキンの進化論、ゴデーの註釋書などから出たものでない。全くカルバリー山上の十字架の血汐の滴である。聽ては之によつて大和島根は愚か、滿蒙の野、

ロツキー山麓、アマゾン河畔、バルト海濱等の人々も同じ生命の恵みに踊る日が必ず來るであらう。○暮に臨んで札幌より吉報は届いた。智子と。さんが安らかに世に生れ出でし

とのことであつた。之を聞きし私共は祖母君の喜びに同じた。三人の姉君となりし正子さんの責任は重くなつた。

○新年に前後して謝意好意を呈する來客は少くない様に見えた。會て柏木に居住せしグンデルト夫人は久し振の訪問で、懐かしき昔語の末、己が銀婚の喜びに恩師夫人を招待して去つたとのこと。矢内原夫人が晴和のどかなる心を開いて藤井全集の美譚や苦心談を苞直に代へて應授問の内外を賑はし、金澤常雄氏は信仰生活の美はしき實驗と希望とを述べて歸らるゝなど歳末も新年も歡喜と平和を以て満さる。

○編輯室に一人の青年武士長木氏は加つた。それでも無言靜肅には變りはない。事務の果取るのは嬉しい。迷惑を願慮しつゝ、同情の願を見せて呉れる友が多い。倒れぬ様に願ひます。眼を大事に使つて下さいなど有りがたい言葉が心に強く滲み込む。昨日に信州木崎湖畔や陸奥湊灣頭の姉妹等が謝詞を寄せて呉れたかと思へば今日は岡山京都横濱山形等の教友より慰藉激勵の言を送つて呉れる。こんなに靜かな仕事に當つて居るに拘らず、時には戰陣に立つの氣持もする。然り實は平和の大革命を起しつゝ、あるのであらう。

日曜日の集會 六日の旅路を只管に祈り、聖旨に隨順し光を仰ぎ、サタンの誘ひを斥け、勇ましく戰ひて、謙遜に

靈肉の疲れを覺ゆる者に取つては、神の賜ふ安息日は恵と力と慰めに盈ちたる天の慈ひの有りがたさを痛感するものである。午前の靜肅なる集會に於て、命を蒙りし教友は左の如く語つて一同を高き處に導いた。

一、近世日本歴史に現はれたる神の攝理 鈴木

日本は長き間佛教儒教武士道によつて精神的存在を保ち來り、神の國とまで稱する特種の國柄であつた。嘉永年間ペルリ渡來して後非常なる進歩を來し、歐米人を驚かすことゝなつた。徳川三百年は夢の様に過したが、然し歐洲諸國が勝手に世界の各地を占領して罪を犯した間にも日本は幸にも保守政策を取つて之に倣ふことをしなかつた。尙ほ世界の趨勢上餘儀なくせられし日清日露日獨の戰爭に於ても案外禍を醸さず済んだ。明治の初年に日本政府が米人クラーク氏を招聘した結果、内村先生が基督信者となり、其生涯を通じて偉大なる靈的業績を遺されたことは、日本歴史上所謂劃期的なる重要な事實である。不信の人々は如何に悶躁<sup>が</sup>くも到底民心を新たにし國の天職を果し得ない。今後生ける信仰は國家の眞の基礎となつて愛と平和を世界に送り出すであらう。廣く高き眼を以て歴史を觀る時には、如何なる代にも神の攝理の一貫しあるを發見する事が出来る。

一、友誼に就て

山 榎

争鬪殺人はカインより傳はり、ヨセフの兄弟等に賣られたるも此性賣の遺傳に因る。随つて眞正の友誼は神の心を持つた人でなければ起らない。ダビデのヨナタンに對する友誼、今井樟太郎氏が内村先生の寫眞を懷中にして居つたといふ眞情、先生が在米中或る鐵道馬車の中で、隣り吊革にぶら下つたベル氏と始めて會ひ、其後一回ホテルで話した切りなのに生涯あの親しさを續けられた友情、中風を病める人の四人の友は彼を昇き出し屋上よりイエスの前に運び、其癒されんことを願ひし爲め、主の賞讃に預りしこと、イエスは弟子に向つて今より汝等を友と呼ぶと申されしことは皆我等の學ぶべきことである。友誼は聖書の脊髄である。友誼は又颯風である。我等もイエスを核心として集り大颯風となつて至純の愛を人類に頒ちたいものである。

一、雜感

大 島

世間一般の人は罪の負債に悩んで年末には特に悲觀に陥るけれど、我等信者は常に恩恵の満ち足れるを感謝するものである。獄中のヨハネがキリストに對して疑問を發したるは、天國を目前に見んとする過激性に因り、キリストがサマリヤを通過せらるゝ時、人々の之を歓迎せざるを弟子

等憤りて、天より火を降さんことを乞ひしも主は之を誡め静かなる態度を執り給ふた。キリストは常に根本真理を教へられたのである。理想の實現せざる此世に於て我等は過らざる信仰の生涯を送らねばならぬ。

一、聖書の讀方 藤 本

聖書は其讀方によつて色々異なるものが生れて来る。カソリックも聖公會もホーリスネスも柘植氏の神癒信仰も皆此一巻の同じ新約全書から出たこと、思ふと、實に不思議で耐らない。何か問題の解決に當つて聖書をトひの様に用ふる信者を見るが、あれは聖書を偶像視するものである。又外側より冷たく知的に研究することや、神學校で教科書の如く講義し二三年で卒業するが如き骨董品扱ひをするは皆誤れるものである。然るに先生が曾て新約全書に現はれたる思想の系統と題して教示せられしは最も正しき讀方であるとして其文章を紹介し、最後に聖書は永遠に尊いものではない。尊きは神と獨子である。我等は聖書の全體を通じてキリストの生命精神に到達しなければならぬと結んだ。

洗足會例會 昨年最後の會合を望まれしは永井氏であつた。曾て全集の實務に身を献けて炎熱と闘ふ間に病を護られし老兄は、同情の祈を藥餌として程なく健康を恢復する

に至つた。十二月十七日夕玄關の袖に残んの花の香りを愛で、奥の間に導かれし十餘名の教友の心には、當時氏の病床の側に筆太く書き置かれし「生くるはキリストなり死ぬるも亦益なり」の聖句など思ひ出で、強く主の祝福を感じた。六時晚餐、清談の間に匙を收めて感謝祈禱會に移つた。讚美歌は高く響いた。司會者の祈について順次に感想は述べられた。○汝等立かへりて靜かにせば救を得、平穩にして依頼まば力を得べしとのイザヤの言は恩師の信仰又行爲であつた。此不動の巖壁の前に立つて現代教會を眺む時に如何に騒々しさを覺ゆることよ。○基督に信頼して其導き給ふまゝに歩めば近親又世人は内村に騙されたなど餘計な心配や非難を寄せ来る。我等は如何に誤解さるゝも飽くまで純なる信仰の道を眞直に行きたい。○惡魔の誘惑は時代によつて其形式手段を異にし、人心の最も留意努力する點に向つて霜を張るを常とする。今日の日本は知識慾に狂せん計りなる様を狙つて、罪の自覺を亂し、謙遜敬虔の心を癩痺せしむ。此厄難を脱し得る者は、贖罪の苦き貴き經驗を味つて十字架の生命に生くる者のみである。○眞の神を信ぜざる民は、凶作に逢ふて怨むばかりではない、豐作の年も米穀の直段安などいつて怨み言をいふ。人の心は物質

を以ては満足し得られない。何よりも福音の宣傳は急務である。○世の中の眞に不憫な人は誰であるか誰人にも眞相は判らない。我等は外見によつて判別することなく常にキリストの愛と福音とを以て萬人に對すべきである。○政治軍事新聞學者經濟方面の人々は如何に聲を大にするも、眞理を愛せず、愛國心を懷かず、確信を持たず、神を知らざる彼等によつては君子國の實を現はし得ない。此時に際し少數者たる我等の上に懸る使命責任や大。○支那人もアフリカ人も救はれん爲に生れ居る。恩師の導きによつて此身も主の救ひに預りしことを思へば日本人も東洋人も救はれぬ筈なし。此間に二三人の祈は交つて又も感謝の間に樂しき集會を閉づるを得た。主婦なき臺所に配膳の勞を敢てせし若き夫人方に同情と謝意とを述べて一同喜び歸つた。

暮のモアブ婦人會は郊外砧村の鶴田姉宅に開かれ使徒行傳第九章にサウロ改心の事蹟を學び、口々に主の恩寵を讀し、夕刻打ち連れて村を出でしと聞く。

**クリスマス** 柏木教友會のクリスマスは廿四日の夜であつた。名古屋氏を司會者に推し靜かに豫言と降誕の聖書を讀み祈禱を捧げ、凡ての附屬的なる儀式裝飾を避け、最も潔からんことに留意した。大島老先生の「時満ち」の説教

ば我等の罪の爲に主の生れ給へる意味の剴切なる教訓であつた。質素なる晚餐の後、會衆三十五人の簡單にして純朴なる感話があつた。互に教友、國民、人類の上を想ひつ、九時半散會。○柏木日曜學校のクリスマスは廿五日午後二時であつた。所謂餘興なるものはなかつたが、先生方や父兄の有益なる話と澤山の贈物とがあつた。一年に一度斯の様にしてエス様を記憶するのは可憐天真なる子供等の爲に甚だ必要な事である。日暮にて雨の中を勇み歸つた。

**内村鑑三全集** の編輯經過の報告及び意見聴取を兼ねる祈禱會を一月十一日夕柏木聖書講堂に開くことに決し、在京の主なる教友數十名に出席を乞ふと共に、編輯委員一同其準備を整へつ、ある。此會合によつて益々神の恩寵と智慧と能力とを加へらる、こと、信ずる。此時代に生れ、此先生に學び、此信仰に生くる全國否全世界に點在する教友は、等しく此責任を感じて生命の贈物を最善の形を以て我等と同時代の同胞と人類とに頒ち、尙後世への最大遺物とせんとする熱望と用意とを有たねばならぬ。

稿を了ると共に在米の佐野氏より、全集につき滿腔の同情と感謝とを表し來る。

## 祖父の書翰 (五)

江 原 萬 里

祖父の書翰は、文久二年の暮、主税及び眞輔殺害事件が勃發したため、翌年一月十三日に至り、之が善後處置として江戸藩邸より藩主の叔父森徹之助が歸城した事を京都に在りて聞きたれば、祖父は二月四日當路の責任者となつた森徹之丞に宛て、此度こそは勇氣を出して事に當れと忠告したものである。書翰は卒爾として思ひ出づるまゝを認めたため、一讀、文意が那邊に在るかを把握し難いが、當時の事情を背景として熟讀する時、彼の心事が次第にわかつて来る。

今其の概要を前以て述べば、此度の事件に由り、久しく幽閉されて居た續之丞が出で、藩の實權を握るに至つた事は芽出度いが、其の任務は甚だ重大である。此の時に當つて「一點も惜生」の念があつてはならない。抑も此の度の事件は、先年財政改革の際續之丞が卑怯であつたために失敗した、其の結果である。當時若し續之丞が身を擲つて藩主を啓沃したならば、此度の輕輩誅大臣之國辱はなくて済んだであらう。されば此度徹之助歸城については身を獻

けて之を啓沃すべきである。徹之助は自分に對しては始めは良く、後自分が勘定奉行となつてからは冷くあつたが、性質英明なれば、啓沃宜しきを得ば治國の基本は立つてあらうと云ひ、次に自分の事を述べて云ふ。自分は赤穂藩のため盡し度くも今はそれが出来ない。追放當時は山野に饑死するも歸參の日を待つ覺悟であつたが、鹽谷岩陰より、かくては皇國の恩を如何にするかと諷され、且つ老母迎養の必要あり、遂に森家の舊領地津山藩に仕ふる事となり、藩主の知遇を受けて居る。故に之がために報ひなければならぬ。今や皇國多事、若し討幕行はれば自分は幕府に捕へらるべく、攘夷行はれば先陣を承る覺悟、折角多年の願なる老母迎養の素志が成つた時此の始末である、今は寸暇なく、赤穂の事一日も忘る暇なきも、赤穂に到り助力するわけにゆかない。續之丞に恩顧を蒙る事厚きも今や義に於て勞を盡すことを許されない。されど働く場所こそ互に異なれ。皇國のため俱に生命を擲つて働きたし。

と云ふに在る。(一)續之丞の性質優柔のため、日本全國大變動期に際し、又もや一藩の大事を誤りはせずやと危惧して、其の勇氣を要望し、(二)且つ當面の事件處置の大方針、引いては又藩政の行路を勤王主義に定むべき事を暗示し、(三)其

の始め十三人が一英時雄の如く祭り上げられ、藩の措置が村上派に對して殘酷であつた反動が生じ、今や再び村上派の擅頭となり、他の極端に至らんとする際であつたから、中道を誤らざるやう、それとなく注意したのである。此の事については、書翰を掲げた後、今少し之を詳しく説く。

一筆啓上仕候、春暖相催候處、先以て御勇健被成御勤仕珍重に奉存候、然ば客臘九日、御地に於て元錄已來の快事、二罪魁斬死の由、同月十七日浪華に於て承之、放逐無用の私驚喜交至、御推察下さるべく候。此節追々其詳を得申候處、執事即日御再勤、吉村氏杯も再勤復古の御政事、誠に難有御事に奉存候。

(勇氣必要)

併し、愚案に、御家屬様方多年の愁眉御開き成され嘸々御嬉敷思召さると奉存候得共、執事の御心中一層御大憂を御増成され候と、不肖の私御推察申上候。何卒人望に不負候様、粉骨碎身して御働き成さるべく候。若し一點も惜生の御心有之候は、御再勤の甲斐有之まじくと奉存候。

扱て先日徹之助様老公より御願相成り、御在所へ御發駕の由承り候。老公は乍恐、御性質御軟弱の様にて、先年折角

の御憤發、花江女(嬖妾のこと)御下け願上候一條より、頼に私共迄御疑に相成、右二姦臣に御恐怖遊ばされ、遂に御出勤御座無く候。時に執事も御同様にて御勇氣薄きより、老公(が)御出勤を諷され候得共御出勤無之、又主税殿大目付付添ひ出府致され候節も、只々御引籠にて一度も御回答無之、空しく讒誣を蒙り成され候義、今以て殘念に奉存候。與國休戚を同じくする(藩主と親族)執事御家筋に於ては、假令如何様なる嚴譴有之候共、國の大事に當て憤然自分御出浮、御議論可然と奉存候。其時執事御勇剛、強ひて御出勤、主税殿并大目付に御直對、彼の姦惡を御折成され候は、老公も必定御憤發遊ばされ、御出勤の御事に相成可きは勿論に御座候。故に當時の事、失敬乍ら、執事御勇氣薄きより惣崩と相成候。

當時 老公の御趣意相立候は、右の主税殿眞輔兩人は既に塾居の身故、悪行も増長不仕、今日輕輩誅大臣の國辱は有之間敷候。是皆執事を始め私共所置を謬り候より、今日の國辱を醸し申候。何卒先年に御商鑒、一入御盡力願上候。柴田吉一郎、入江新之丞は反覆の小人、此二姦臣に内通裏切せしより惣崩に相成候。今日に至迄視たる面目、要路に昂然として晏居候義、可惡の至、此者御所置無之では御政

道も偏頗に相成へく奉候候。

(徹之助の人物)

徹之助様初て御在所に御出の節、(私共)御廣間詰に仰付られ、炮術等にて大に御機嫌に叶居候、其後出府(江戸)の節も大に御愛しの處、一旦御勘定奉行仰付られ候より、顧に御悪く成らせられ、日々難題仰遣はされ、大に迷惑仕候。

然れ共これは御承知の通、先役小川平左衛門より御頼まれ成され候事も有之候由、又私當役に罷在候ては御不便利なるよりの御事にて、實は御性質御英明に候間、此際御發憤成され候はゞ、定めて治國の御基本も相立申べくと恐悅し奉り候。何卒宜敷御啓沃有之度奉願上候。

(自分の事)

私退去の節、大阪に至り候處、河原駱之輔(村上眞輔の實子)先達て在坂の私の懇意の人に皆々讒間いたし、又江戸に至り候處、私扶助も致吳候様の諸候に高木衛門七父子讒間致し、誠に困窮に消光仕候。然れ共、舊主の洪恩、父母の國、忘却仕り難く、若し歸參の期も無之ば山野に棄死仕るべき覺悟にて鹽谷甲藏杯頻に筮仕をす、め候得共、承知不仕候。復又甲藏申聞候には、赤穂の爲に義を守候共、皇國の浩恩は如何して報ひ候や、且つ一人の老母迎養不仕候は相成らず、

迎養の爲めに筮仕候段、義を缺くと申者にも無之候と、種々教戒致され吳候に付、依て筮仕に一決仕候。

願は、作州は先君の御舊領、此地に住居候はゞ猶赤城に在るが如し。私不肖にして當時御役人に放逐せられ候共、先君の御勘氣は不蒙と天地も照覽あれ、心に頼み居候。幸に知己の拖情も有之、憤然として一昨々年十一月晦、妻子を携へ江戸表出立、三十日にして十二月晦津山に着仕候。

當日より村夫子を致し糊口仕候得共、未だ老母を迎ふるの資は無之候、去年五月、國校の諸子學問教授を頼まれ、依て出勤致居候處、同十月二十二日日本藩に召出され候間、即ち老母迎養致度存候處、豈はからんや同廿五日上京を命ぜられ候。再三辭し候得共許容無之、今以て滯京罷在候。尤十月出立前、老母へ、私上京の跡なれ共作州へ參り吳候様に申遣し候得共、私歸國の上參るとして申答候間、老母の心中推測り、其儘上京仕候。其後兩度歸國、都合三度の上京に御座候。

私今日實に必死の覺悟に御座候。何となれば、航海の策に一決候はゞ、必ず幕府に召取られ可申か、攘夷に御一決候はゞ、主人の建白、先陣を請候事故、一番に戦死可仕、又因循不一決の時は内業に内憂生じ可申候。爲國家盡力可仕候

様に勅諭有之候上は、右等の事に付治國平天下の周旋致さずは相成らず候。皆其の先衝に當り候私身分、迎も歸國(赤穂)無覺束候。且つ新參の私筆仲間もなく拔擢を蒙り、一藩の榮辱に關係仕候他所應接(尋)申付られ候事故、人のそねみも不少、種々譏笑を蒙り候。但し赤穂退去の事種々惡言も有之候處、十二月兩姦變死に付私聲價を増し候由申者御座候。忠臣去國不潔其名誠に可愧の至に御座候

何分にも十五歳勤仕後、一時も老母に安心仕らせ候事無之心配相懸候處、漸く津山に落付、先公の舊國なり、旁老母迎養可仕、一時喜候處、右一生九死の場合、迎も今日迎養相叶はず落涙濕袖、幾重にも御推察下さるべく候。

(勤王主義勸告)

又御藩の一事一日も忘却不仕、何卒宜敷御所置を以て雨降て地堅るの鄙諺の通相成可き段、乍陰奉願上候。鄙心は、

家を去り、國かはるとも、ますら雄の盡す誠は、大君にこそ。

私義執事知己の賜有之、猶驥尾に付て方寸を盡すべく候處、最早義に於て可仕かたし。何卒兩所に御立別申候共、奉公の道は幾何も可有之、俱に皇國の大恩に空浴せず候様、身命を擲つて相働度事に御座候。七八年の積愁勃々然として

胸中に浮候得共、多忙繁劇、筆紙難盡、後鴻申上可く候。右失敬不顧、思事前後無秩序に申上候、幾重にも御仁恕下さるべく候。恐惶謹言。

鞍邊寅 二郎

森續之丞様

時下折角爲國御自重成さるべく候。先月小笠原圖書頭殿に拜謁候處、御手前様御事御尋成され候間御近況委細申上候先年手前様初私共種々御心添下され、態々御屋敷えも御出下され候處、老公御面會無之、空敷御歸へり、右等の事御話有之、依て血涙申候、右御承知下さるべく候。早々いも。

此の書翰の興味は、我國をして善く明治維新、王政復古中史集權の大業を成就せしめ、外より迫り來た歐米諸國の勢力に屈從することなく、獨立自主を完くせしめ、短日月中に彼の長を探つて我の短を補ひ、文物諸制度燦然として輝き、東洋諸國の指導者となり、世界屈指の大國の一に居る事を得せしめた、其の精神力たる武士道を示し、而して



武士道の精華は君國に忠、家親に孝を經緯として織り成されたものである事を知らしめるところに在る。

然かも、それにつき尙も興味ある點は、此の忠孝が緯となり、經となつて、時の織物のうちに交互に顯はれつゝ、次第に其の色彩を變へて來るところに在る。

祖父は其の初め、赤穂藩に仕へて一身を獻けて忠を盡さうとして、遂に逐はるところとなつた。逐れて後も歸參の許さる日を待ち、一途に父祖の地を思つた。然かも老母迎養の必要に迫まれ、他方岩陰より、赤穂藩に忠ならんとして、皇國の浩恩は如何に之を報ひんとするかと諒され、他藩に仕ふるも忠義に於て缺くるところなく、否、却つて藩よりも皇國の方が更に大切であると思ふに至つた。一家と其の母とを思ふ念は、彼の心を藩以下に狭めず、孝は彼の心をして藩以上に高め、日本國大に之を擴けしめた。

然り、而して折角老母迎養の志を遂げやうとした時、宛も皇國の大事に際會し、彼は孝ならんとして忠ならざるよりは、寧ろ忠ならんとして孝を後にするの已むなきを感じた。そして眞の孝を成就したのである。こゝに我國封建時代の最高の道徳が明治時代のそれへと變遷し、藩の上に日本國を發見した興味ある經路がある。

今や眞の日本人の心の奥底には、更に日本國の上に東洋あり、世界の存在を意識し、如何に此の爲に盡さんかとの思念が生起しつゝある。嘗て孝なる基石の上に、狭き忠が藩より全日本國的となり、一段の高所に飛躍したやうに、今や眞の日本人の忠は狭き日本より、更らに廣く全東洋を包容し、又全世界的とならんとしつゝある。而して之が轉回の基石としての孝も亦純化を要求しつゝある。即ち孝は更らに靈的となり、宗教的となり、父なる神に對するキリストの孝心たらん事を要求して居るのである。日本人の心に此の孝が生れて、日本は更らに擴大せられ、全東洋、全世界的となる。嘗て黒潮の流が我國を襲うて、國內的に我等の父祖を覺醒せしめたやうに、今や太平洋の碧波が我等に之を迫りつゝある。

其の事はさて置き、此の書翰に於て、祖父は森續之丞に身命を擲つて勤王主義に基いて、赤穂藩今後の方針を定め、その處置をなさん事を勧告した。然るに森の處置は其の宜を得なかつた。その結果は藩政益々混亂し、遂に村上眞輔の子等が、父の仇として祖父の姉婚野上鹿之助を暗殺し、更に明治四年、十三人中の殘存者を皆殺しにするに至つた。此の事件を我國最後の仇討と稱せられる。それは時の

上からばかりでなく、その精神的意義からしても正當である。何となれば古來我國の美德とされ、又孝の最高の顯れと看された親の仇討は、實は孝の向上でなくして、却つてその墮落であり、道徳的に賞讃さるべきものでなく、却つて呪詛すべきものであり、必ず廢棄されねばならない、と云ふ事を、此の仇討は如實に我等に教えるからである。此の事件は祖父の生涯に多少の關係あり、且つ事のついであるため、私は之を略述し、次で祖父は此の書翰で語つて居るやうに、如何に彼が「皇國の大恩に空浴せず候様、身命を擲つて相働」いたかを述べ度い。

さるにても、我等の父祖は自分の利益を思はず、假令主に乗てられ、藩を追放されても尚君恩、國恩、親の恩、師の恩、友の恩、恩恩に感じ、之を忘れず、如何に只管之に報ひんとした事か。或は階級鬭争、或は享樂、或は野心、自己の利益と快樂との外に何の念なき現代と如何に異なる事か。我等基督教者も亦眞に反省すべきではあるまいか。

## 感謝と希望 主 筆

今年程感謝に満ち、歡喜と平和と希望とを以て迎へた新年は近年ない。不治絶望と云はれる病氣から不思議に助かつた。きつと行詰るであらうと思はれた暮しは不思議に維持された。債鬼門に迫らず、昇級やボーナスに心煩はされず、心は春の如くに和やかであつた。雜誌は多くの人々から感謝され、足一步鎌倉を出ない私は、居ながらにして日本全國のみならず、世界各地に散在する善き信仰の友を得た。自分の爲しつ、ある仕事は無益な事業でなく、道樂でなく、これこそは新日本の建設事業であるとの確信を得た。かくして感謝の舊年を送り、希望の新年を迎へた。

昨年未開かれた鎌倉聖書塾のクリスマス祝賀會は極く少數の集であつたが、樂しかつた。數年來こんな樂しい集に出たことはない、昨年私の「經濟觀」を讀んで信仰を得られた岩波夫人は感想を寄せられた。

本號所載「世の悲慘と神の存在」は全夫人に宛てた、一般マルクス主義研究の廉で免職になつた某小學校教師の疑問に對する私の答である。私は世の罪惡があればある程、益々神の存在を信ぜずには居られない。

丁度その如く、我が國人は明治維新以來、世界的大帝國を建設せんとして、臺灣を領有し、朝鮮を併合し、滿蒙を征し、太平洋に展びんとし、或は飽くことを知らざる熱心を以て西洋の學問を學び、産業を發達せしめんとしつゝあつた時、早くより一人の青年が、祖先傳來の大和魂と遙かに群を抜く顯才とを以て、當時世人が甚しく嫉惡する基督教の聖書の研究に、その一生を献げ、其の中に今後我が國民が全東洋を包容し、世界に新文明を提供すべき原理を發見し、新日本の國礎を指示したのであつた。内村先生の聖書の研究とは實にかゝる者であつた。

實に内村先生の基督教なるものは、我が國民をして明治維新の大業を成就せしめ、世界に活躍し得せしめた、世界に誇るに足る大和魂の保存とその聖化向上に外ならなかつたのである。明治維新以來、我が國の最上の頭腦と心臓とが西洋の哲學、文學、科學、法制經濟等に心酔しつゝあつた時、又空しく我が國粹の保存に焦慮して其の途を知らなかつた時、「眞の日本人、その裏に虚偽なき」ナタナエルの心情を以て、父祖が四書五經等に由つて養ひ來た日本精神を、聖書に由つて新に生かし、之を向上せしめ、新時代に備へしめたのである。之を聖書の眞理に照して新なる理想を提示し、その到達の途を發見したのであつた。

日本人の日本人たることは、戰爭に強いことではない。商賈に巧みなることでもない、又指先の器用なことでは勿論ない。朝日に匂ふ山櫻花の如き「その裏に虚偽なき眞の日本人」とは道義心肝を貫く者である。眞の義人たる事に在る。天地の創造主なる正義の神に對して義しき關係に立つ事に在る。之以外にない。而して一度正義

なる神に對して義しからんか、期せずして善き政治あり、教育あり、産業は發達し、幸福は増し、平和は來るのである。

如何にして神に對して義しからんか、これ先生が眞の日本人としての靈魂の最も眞劍なる欲求として、其の途を聖書に求め、遂にルイテル、カルビン、クロムウエル、バンヤン等と同じく我等の罪を贖罪ふために十字架に死して甦り給ひし我等の救主、神の子イエスキリストを發見するに至つたのである。彼に於て、我が國民の眞精神たる大和魂の保存とその聖化との途を見出したのであつた。

されば先生の基督教は、源信、法然、日蓮、道元の心情と、宣長、篤胤の愛國的精神とを以て、人類の救主ナザレのイエスを信じ、彼に於て永遠の救の希望を懐くに至つたものである。先生の日本國は伊藤、山縣、大隈等の日本國でなく、靈的に偉大なる日本國であつた。先生は嘗て次の特色ある言を發せられた。「明治大正の物質的文明は日本に取り一時的現象であつた……日本は今や自己に覺めんとしつゝある。……その聖き理想を言表はしたものが平賀源内の有名なる一首である。

さし昇る朝日の木の光りより

高麗唐土も春をしるさん。

日本に昇る道の光を以て世界の暗を照さんと欲するのである」と。

「今や西洋の諸國民がその父祖の信仰を棄て、同時に西洋文明の凋落が次第に傳へられつゝある時、而して我が國の大多數の者が今尙西洋文明の皮相を追うて之を模倣し、軍事に、産業に、政治に只管後れざらんとして居る時、先生は我が國民が今後進みゆく可き途を七十年の自らの生涯に於て體達されたのであつた。(以下次號)

# 「内村鑑三全集」 豫約出版

体裁 四六版、四十五字詰十八行、各卷大凡六百五十頁

巻數 二十巻

- 第一巻 及び 第二巻
- 第三巻 及び 第四巻
- 第五巻 乃至 第七巻
- 第八巻 及び 第九巻
- 第十巻 及び 第十一巻
- 第十二巻
- 第十四巻
- 第十五巻
- 第十六巻 及び 第十八巻
- 第十七巻
- 第十九巻
- 第二十巻

初期の著作

舊約

新約

研究

講話

感想

所感

英文

日記

書翰

英文

發行期日 三月下旬、著者逝去記念日頃第一回配本、以下毎月一回

出版方法 豫約出版

定價 一部二圓（別に送料を要す）

各巻の内容其の他追て確定せらるべし

以上、聖書の眞理社は此の喜ばしき全集刊行に就き滿腔の賛意を表し、讀者諸氏にその豫約をお勧めし、且つ喜んで出来る限りの便宜を提供し、そのお取次をします。續々申込せられん事を勧誘します。

## 聖書の眞理定價（送料共）

- 一 部 二十錢
- 半年（六部） 一圓十錢
- 一年（十二部） 二圓十錢
- 海外一年 二圓六十錢

拂込は本社（振替東京六三三七五番）又は獨立堂（振替東京一九四六八番）何れにてもよし

## 昭和六年度合本（送料共）

總クロス製 二圓五十錢

昭和七年一月廿九日 印刷納本  
昭和七年二月一日 發行

神奈川縣鎌倉町扇ヶ谷三四三  
編輯印刷 江原萬里  
兼發行人

東京市外濠谷町向山九七  
發行所 聖書之眞理社

東京市神田區表猿樂町一九  
印刷所 共榮堂印刷所

東京市外濠橋町柏木九四六  
發賣所 獨立堂書房

（昭和三年二月十六日）  
（第三種郵便物認可）

聖書之眞理 第五十二號

昭和七年二月一日發行  
（毎月一回一日發行）

本誌定價二十錢